

特集 ■ 法然上人八百年御忌、浄運寺開創八百年

# 念仏すけささぬ人(三)

— 角張成阿のこと —

東北大学名誉教授 高橋 富雄

「初声の一言 法性を知る」

念仏申さんもの十人あらんに、たとひ九人は臨終あしくて往生せずとも、我一人は決定して往生すべしと思ふべし。

『論語』には「自ら反(かえり)みて縮(なお)くんば、千万人と雖も吾れ往かん」という有名なことばがあります。あの温順玉の如き法然上人にも、イエスかノーか、二者択一が問われている時には、『論語』に勝るとも劣らぬ断々乎たるきびしきで勇往邁進するきびしきがありました。浄土宗の禁止命令が下り、四国配流の罪人として都を離れる上人は歎き悲しむ弟子たちにごう言いました。「此法の弘通は、人とどめんとすとも法さらにとどまるべからず」。わたくしはこのように莊嚴なことを聞いたことがありません。ソフトです。しかし「千万人と雖も吾れ往かん」よりはるかに厳肅です。この使命感から「たとひ死刑にをこなはるとも、この事(念仏) いはずばあるべからず」の誓いのことばにな

るのです。

「衆生称念 必得往生」。これは本願の念仏が約束されているところのものです。しかしそれにも万々一ということがある。十人中、一人ならず二人ならず、自分を除いた九人がそろって往生できないというところが、もしあったとしても、「我一人は決定して往生すべし」。それだけの深信に徹していねばならぬ。そのう法語で上人が説き諭される時、それは「法然ソフト千万人と雖も」を「信心ハード千万人と雖も」に言い直して、臆し卑下する信者弟子たちを上げられたものです。

そうして、わたくしは、その「選ばれた我一人」の、まさしく「すけささぬ念仏者」として、「ある日の角張成阿」の、それはそれは、まるで錦絵に見るような千両役者ぶりを紹介しようとするのです。

そうです。法然上人一代、浄土宗の興廢をこの一挙に賭けた大原談義の名場面です。『大菩薩峠』の作家中里介山はその名著『法然』の中で、この大原談義の持つ歴史的意義を、

世界史上の宗教裁判のそれに擬してその評価を不動のものにしたのです。

「介山法然」がそういう考え方をしたのは、法然伝記『正源明義抄』によつていました。しかし「介山法然」はこの伝記の原典批判に自信を持つことができなかったために、ここに展開されたドラマの真にドラマ的な世界を的確に再現することができませんでした。このドラマの真の意味の主人公が、師法然上人でなしに、無名の弟子角張成阿であることの正しい理解に到り着くことができませんでした。今わたしたちは「介山法然」続篇「角張成阿口上の段」をここに追加しておくのです。

時は文治二年(一一八六)、所は大原竜禅寺。天台座主顕真主宰の聖道・浄土立宗の正義を問ひ資す宗論は、今、幕を切っておろそうとしていました。「いかなる文殊舍利弗の智慧なりともかなふべからず」。「弟子らは、わが師匠今日をかぎりにうせたまふべきよとおもひあひ、われらの念仏門もここに破れ去るか、みな覚悟の臍を固めていたのです。

上人お供の中に信濃国の住人角張七郎太郎入道成阿なる者がいました。師上人を正座にすえたてまつり、右往左往する同門の衆を制して、凜たる声で呼ばわったというのです。「いかにや御房達、これへ参たま

へ。今日こそ、自宗他宗の得否、今日を限るべし。出離一大事の御法門、聴聞つかまつらん事、われら人界の生をうけたるさひはひなれ。人身のおもひで、宿善のほど、これなるべし」。大音声に呼ばわるその顔は笑みを浮かべていたというのです。

まさしく「反みて縮くんば千万人と雖も吾れ往かん」を画にかいたような光景です。満堂を埋めつくして立錫の余地ない二千の聴衆は、一斉にこのハブニング・ショーの成り行きに注目しました。三百人から成る聖道派の学生たちは、事あれかしと待ち構え、有無を言わさずたたみかけ、一気に「浄土宗のはたほこを倒しおらん」と意気こんでいたところだったので。呆氣にとられました。

「たとひ日比(ひごろ)内談したりとも、ただ今のなかにては、かやうに振舞べしとおおほへず。初声の一言をもて法性の深厚をしようと云云。法然房の智に、われらを物のかずともおもはぬゆへに、今この入道もかくのごとく振舞ごさんぬれ。加様にては、今日の問答に決定つまりぬべしとぞ思給ける」。

勝負はもうここで決していたのです。法語に「我一人決定して往生すべし」とあったのはこのころです。成阿一人決定して、勝負のすべてが決定することになったのです。